



## 衛青、霍去病、李広 (史記の中の名将軍)

10月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所  
2022年10月1日(土)

漢は初代高祖劉邦から六代景帝にいたる数十年間、匈奴に対して常に受け身の立場に立たされてきた。これを逆転し、積極的な匈奴攻撃を実行したのは七代武帝であった。武帝は続々とオルドスの地(内モンゴル等)に討伐軍を送り込み、匈奴との間に大激戦が展開され、幾多の名将が輩出した。

先ず、大将軍衛青。彼は正妻の子供たちから奴隷の扱いを受け、暗い少年時代を過ごした。ところが、同腹の姉、衛子夫が武帝の愛妾(後に皇后)となるに及んで、その運命が一変する。

車騎将軍に取り立てられて匈奴討伐の緒戦に大功を立て、長平侯に封ぜられた。その直後匈奴の右賢王と闘い、これを撃破して、その副王10余人、捕虜15,000人、家畜数十万頭捕獲するという大戦果をあげた。衛青が国境の砦まで引き上げると、武帝は使者に印綬を持たせ、大将軍に昇格させ、諸将の軍はすべて衛青の指揮下に入るようになった。

霍去病は、衛青の甥で、少年の頃から武帝に可愛がられて宮中に出仕していた。十八歳で従軍し、遊撃隊を指揮してめざましい戦いぶりを示し、驃騎将軍に命ぜられた。霍去病は、匈奴の渾邪王を降伏させ、十万と称せられる匈奴を漢に帰属させたが漢の将兵には全く損傷がなかった。

霍去病は若い時から武帝の側近となり、高位についたためか部下を労わることを知らなかった。彼の出陣のとき武帝から車数十台にのぼる珍味佳肴を受け、その食糧はあり余って捨てねばならぬほどだったが、この間、士卒は飢えに苦しんでいた。

これに引きかえ衛青は情け深く謙虚で、穏やかな人柄であった。にも関わらず声望は霍去病に遠く及ばなかった。

匈奴が最も恐れた漢の将軍は李広であった。

李広は右北平の太守として着任した情報はすぐさま匈奴に伝わった。

「漢の飛将軍がきた」と言って恐れをなし、匈奴は以後数年間、右北平には侵入しなかった。李広は金銭に淡泊で下賜された恩賞はすべて部下に分け与え、飲食も常に兵と同じものをとった。李広の兵はいつも強かった。

また、李広は弓の名人で、ある日草むらにある岩を虎と見間違えて矢を打ちかけたところ矢は岩に突き刺さった。そこで改めて矢を打ちかけたが、何度試みても岩には二度と突き刺さらなかった。